新刊紹介

内田啓一著
『後醍醐天皇と密教』

阿部美香

後醍醐天皇とは何者か。彼の王は、俗体のまま袈裟を着し自ら密教の修法を行ったことから、「異形の天皇」とも称されてきた。本書は、それを特色づける〝王の密教〟に焦点をあて、解き明かす。

著者の内田啓一氏は、日本美術史を専門とし、『江戸の出版事情』や『日本仏教版画史論考』など、多くの著作がある。そのなかで本書は、『文観房弘真と美術』（二〇〇六年、法藏館）にまとめられた文観研究が基盤となり、あらたに生まれた一著である。

文観は、西大寺叡尊の流れを汲む律僧であり密教僧として、後醍醐天皇を支えた重要人物である。しかし、後世に立川流の邪義を伝えた僧として異端視されたため、本来とは違う文観像が、長く仏教学、国史学、国文学研究者らによる文観研究を呪縛し続けた。それを否定し、立川流との関係を完全に断ち切って、真の文観像を照らし出した画期的労作が、『文観房弘真と美術』である。長い呪縛から解き放たれた文観研究は、特に国文学の側からその著作に関する文献研究が進められ、目覚ましい成果を挙げつつあり、内田論はますます補強されている。

2010年7月15日発行
法藏館
四六判　256頁
定価 2000円（本体）

その研究成果をふまえ、視点を後醍醐天皇の側に移して、その生涯を密教との関わりからとらえ直す試みが、本書の眼目である。

密教のなかに生きた後醍醐天皇が、その生涯をかけて目指したものは、いったいなにか。著者は、それを「密教における王権の地位の確立」であると見通す。そして、後醍醐天皇が〝密教の王〟として独自の世界を築きあげて行く過程を、遺された美術作品（密教美術）等から一つひとつ丁寧に掘り起こしてゆく。

後醍醐天皇の密教を理解するために、本書がまず最初に取り上げるのは、後醍醐天皇に大きな影響を与えた、父・後宇多院と密教との関係である。後宇多院は、二流に分かたれた密教法流の頂点に自らを位置付け、大覚寺や東寺を再興する。その中核には、弘法大師信仰があった。そのことが、大覚寺に宸筆として今なお伝わる『御遺告（御手印）』、『弘法大師伝』、『高雄曼荼羅御修復記』、ならびに東寺所蔵「談義本尊」画像などから示される。

そうした父親の影響を受け、後醍醐天皇は積極的に父と同じ路線を辿りつつ、しかしそれとは異質で、はるかに超越した世界を目指してゆく。それを支えプロデュースした人物こそ、文観である。

優れた図像家としても名高い文観が後醍醐天皇のために創出し遺した密教美術の数々を、著者は努めて客観的な立場から解読し、制作の背景や意義を読み取って行く。たとえば、第二章第二節にまず取り上げられる奈良般若寺の旧経蔵本尊・八字文殊菩薩像は、制作目的に後醍醐天皇の倒幕の意が秘められていると考えられてきた仏像である。その根拠となった墨書銘の解読に対して、著者は

慎重な読み方を示し、本来の造像目的を推測する。

本書では、密教の歴史や儀礼、美術作品に対し、一貫して丁寧で行き届いた解説が施されており、初心者にも分かりやすい（著者の監修に『密教の美術』がある。二〇〇八年、東京美術）。その上で、美術史を専門とする著者ならではの研究の視点や方法が惜しみなく導入されており、その明快なリードによって、歴史を読み解く醍醐味を追体験することができる。それは、読者にとって、最高の贅沢といえよう。

さて、後醍醐天皇と文観の密教において特筆すべき出来事は、やはり国家の中枢である宮中において、天皇が文観から密教の奥義を伝える両部伝法灌頂を授かり、その直後に『御遺告大事』を授かったことであろう。それは、文観が後醍醐天皇のために創出したテクストで、「弘法大師信仰と宝珠信仰を合体したような体裁」をとり、かつ「宝珠・不動・愛染の三尊合行」という秘法を説いた秘伝書であった。これを手にした天皇の心中を、著者は「父・後宇多院の大師信仰を超えた気持ちだろう」と的確に指摘する。後醍醐天皇は、そののち文観から究極の秘密である瑜祇灌頂を授かるのだが、その場に空海ゆかりの希代の重宝である東寺の犍陀穀子袈裟を着し臨んだという。それは、まさしく王と弘法大師の一体化の秘儀であった。とすれば、著者が指摘するところの、空海そのものを志向する後醍醐天皇の目的は、この時点ですでに大きな達成を遂げたことになるだろう。

興味深いことに、鎌倉幕府の滅亡前後、そして建武年中の新政期に、後醍醐天皇は空海や東寺に関わる宝物を宮中に召し上げ、また反対に空海ゆかりの聖地に施入する行為を繰り返し行っている。例えば、四天王寺からは聖徳太子ゆかりの『四天王寺御手印縁起』を宮中に召し出し、自ら書写して御手印を捺し返納する。高野山からは空海の著作と仮託される『金剛峯寺根本縁起』を召しだし、やはり御手印を捺している。日本仏教の始まりを担う聖徳太子と高祖空海の縁起のそれぞれに関わり、あらたな価値づけをして施入する行為も、〝密教の王〟として行った王法と仏法の一体化を目指す営みなのだろう。そうした事蹟が必ず空海や聖徳太子の縁日に「冥応」と称して行われるのは、後醍醐天皇独自の行動様式であるとの指摘も面白い。

神奈川県・清浄光寺（遊行寺）の後醍醐天皇御影は、『瑜祇経』と愛染明王を好んだ後醍醐天皇の〝密教の王〟としての理想的なすがたを、今に伝える貴重な肖像画である。五七日忌（三十五日）の追善供養の場に懸けられたというこの像は、天皇を最も身近で支え続け、空海の再誕とみなした文観ら密教僧たちによる追悼のモニュメントである。その上部には、太く堂々たる筆跡で、「天照皇大神」「八幡大菩薩」「春日大明神」の三社の神号が記されている。著者によれば、さらなる霊性を持たせるため、追加して貼り付けられた形跡があるという。それについての検討は、実地調査の上で報告したいと宿題として残される。著者のユニークな視点と巧みなリードで、後醍醐天皇の密教に取り憑かれた後では、著者とともにこの宿題を果たすのに立ちあいたい衝動に駆られるのは、自然な成り行きであろう。これこそ後醍醐天皇勅筆の神号だったのではないか、などと、つい夢想したりしてしまう。

密教の重要性は理解していても、研究として取り組むのは難しい。しかし、本書は中世仏教と王権、あるいは密教を学んでみたいとの志を持つ学生にこそ、読んで欲しい一冊である。

（あべ　みか　本学非常勤講師）